

氏名・（本籍地）	土 田 順 子（東京都）
学 位 の 種 類	博士（文学）
学 位 記 の 番 号	甲第 55 号
学位授与の日付	平成 20 年 3 月 15 日
学 位 論 文 題 目	<b>富岡多恵子の作品世界の変遷とその推移における ガードルード・スタインの影響について</b>
論 文 審 査 委 員	主査 伊 藤 淑 子 副査 シャウマン・ヴェルナー 副査 藤 井 か よ

## 土 田 順 子 氏 学位請求論文審査報告書

### 「富岡多恵子の作品世界の変遷とその推移における ガードルード・スタインの影響について」

#### 論文の内容の要旨

本論文は富岡多恵子に及ぼしたガードルード・スタインの影響をスタイルとテーマという二面から分析し、両者の創作を比較することを目的としたものである。文化的背景も時代も異なる二人の作家であるが、その自意識形成には類似点もある。自我との葛藤を通して、富岡とスタインが文学的スタイルをそれぞれどのように獲得し、展開したかを考察する。

第1章ではスタインの訳詩から富岡が受けた間接的影響について論じる。富岡の作品世界の変遷と意識変化の過程をたどっていくと、社会的に女性と認知されることに違和感を抱えていたことがわかる。詩を書き始めた頃の富岡は、自分を両性具有的な存在とさえみなしていた。女性であることから生まれる劣等意識は増幅し、詩人としての自己の能力や創造性に懐疑的になり、創作者であろうとする富岡にとって、女性であることは障害であるとしか認識できない時期が続く。富岡は自分自身の生物的属性に正面から対峙することができず、負のエネルギーを創作へ転化しようとするのであるが、春山行夫によるガードルード・スタインの詩の翻訳に出会ったことが、この袋小路から富岡が抜け出す大きな転機の一つになったことを実証する。

第2章では富岡がスタインを翻訳するという体験を通じて受けた直接的影響について論じる。具象性と抽象性を結びつける独自の詩作方法を実践する富岡は、易しいことばによる前衛的な抽象性を有するスタインの詩に対して関心を持っていた。やがてアメリカに渡り、スタインの資料に直接触れる機会を得た富岡は自ら詩、エッセイ、小説の翻訳を手がけるようになる。その体験が富岡に対するスタインの影響を決定づけたと論じる。スタインは20世紀初頭のモダニズムの流れのなかで先導的役割を果たした存在であり、ヘンミングウェイらを称して「失われた世代」と命名するなど、時代の変化を的確に言い表したことで知られているが、作家としての評価は当時はさして高いとはいいがたかった。スタインにとって

も、女性であることはジレンマであった。富岡は詩作の時期から最初に小説を書くまでの間に最も強くスタインの影響を受けている。富岡の翻訳には誤解や誤訳があることも確かであるが、直接スタインの英語表現と格闘することによって、富岡はスタインのスタイルを咀嚼し吸収する。その過程を、最後の詩集『厭芸術反古草紙』と最初の小説『丘に向かってひとは並ぶ』から分析する。

第3章ではスタインと富岡のテーマ的な影響関係について、小説を中心に検証する。ジェンダーの観点からは、富岡がヘテロな視点で男性を意識していたのに対して、スタインは同性愛者としてパートナーを得て生活したという事実がある。その差異に注目しながら、女性が創作者であろうとする時に直面する問題には、文化と時代を超えた共通性があることを考察する。富岡は家族をテーマに小説世界を開拓するが、スタインの初期の小説『アメリカ人の成り立ち』も自分自身の家族の三代記ともいえるものであり、両者が小説を書き始めた時期に最も大きな関心を寄せていたのは家族の問題であった。そのなかでも重要な要因になるのが母親の存在である。富岡とスタインに共通することは、母娘関係の両義性である。愛情の根源である母親の生き方や価値観を受容できないことが、富岡やスタインの作家としてのアイデンティティ形成に大きな問題を投げかける。スタインは同性愛の成就において男性性と女性性の規範の相克を乗り越えたのに対し、富岡は母親に対する観念的な反発を内包したまま精力的に性や家族の構造に潜む欺瞞や矛盾を追求する。

第4章では、富岡の小説のうち『逆髪』を一つの到達点として、スタインの作品では『みんなの自伝』を『アメリカ人の成り立ち』以降の作品の到達点とみなして、富岡とスタインの作品の変化の過程を分析し、比較する。富岡は『芻狗』で、性や家族の構造を解体する視点を持ったラディカルな女性像を描いた後、『波うつ土地』では両性具有的な女性像を作り出した。書くということは両性具有的な視点に立脚する行為である、というのが富岡の見解であると分析する。『逆髪』は富岡が小説で追求してきた家族の問題の集大成である。富岡はこの小説の女性主人公において、ラディカリズムとセンチメンタリズムの両立を可能にしている。一方スタインは『トクラス自伝』においてはじめて商業的に成功したあと、筆力を失っていたが、『トクラス自伝』の続編として出版された『みんなの自伝』には、その頃の精神状態が率直に書かれている。スタインは『みんなの自伝』で『トクラス自伝』の客観的視点を捨て、虚像としての自己ではなく、実在としての自分の内面を描くことをめざす。この作品でスタインは幼少の視点と感性にたちかえり、自己の経験の意味を探り、率直で平易なスタイルへと転換する。富岡とスタインが、それぞれどのように分裂した自己をふたたび統一しようとしたのか、その葛藤を作品に即して比較分析する。

富岡とスタインの共通点は、既定の表現にとらわれないことばの模索と、女性としての自己をどのように受容するかという葛藤である。富岡はスタインのことばの秩序の破壊と新しい意味の創出に惹かれたが、二人には女性作家としてテーマ的な共通点があることも注目し値する。富岡がスタインから受けた直接的な影響は文体であったが、主題においてもスタインと富岡は、時代と地域を越えて共鳴する。

### 審査結果の要旨

本論文の意義は、富岡多恵子に対するガートルード・スタインの影響を、両者の著作を丹念に読解することによって詳細に考察したことである。富岡についての論文は少なくないが、本論文で試みたようにスタインの文学と富岡の文学を可能な限りすべて読んだ上で比較し、影響を論じた研究はこれまでなかった。富岡は日本語を、スタインは英語を母国語とする作家であり、両者の著作を比較するためには、英語の文献を読みこなす十分な語学力が必要になることもその理由の一つであろう。加えてスタインはきわめて実

験的な言語表現を实践した作家である。単純な表現を繰り返し、変奏曲のように変化させていく文体を理解するためには、相当の語学力を要する。自らスタインの影響を受けたと言う富岡の作品世界を解き明かすために、スタインの影響を分析した本論文は、新しい確かな視座を切り開いたといえる。

一方スタインについても、本論文は富岡という比較の視点を用いることによって、新しい解釈を示すことに成功している。スタインはアメリカ文学の白人男性中心のキャノンの読み直しが進むなかで注目を集めるようになった作家であるが、その著作の読解はいま多くの研究者がさまざまに試みているところである。富岡に与えた影響という逆照射によって、スタインが実践したモダニズムの意味を、文化、国、言語を超越するものとして分析した本論文は、スタイン研究にも大きな貢献をするものであるといえる。

生年は富岡が1935年、スタインが1874年と、半世紀ほどの隔たりがあるが、その二人の女性作家は富岡がスタインに惹かれるというかたちで、影響関係を形成する。二人の言語表現の実験においてどのような共通点と相違点があるかを解き明かすため、富岡のスタイン受容の過程を丁寧に追う手法は、フランス学派の比較文学の分析方法の流れをくむものであるが、そこにフェミニズム批評やテキスト論などの批評倫理を応用して、筆者独自の考察を加えていることも評価に値する。

比較文学の論を立てるときにもっともむずかしいことは、なぜその両者を比べる意味があるかということの説明することであるが、本論文は序論において、富岡とスタインの影響関係を立証し、比較の意義を提示することにおいて成功している。第一章では具象性と象徴性の結合を詩作において模索していた富岡が、スタインの詩を受容するための問題意識をすでに十分持っていたことを示し、富岡におけるスタインの影響が、たんなる偶然ではなく必然であったことを、説得力をもって論じている。第二章では、渡米後エール大学に残るスタインの膨大な資料に触れた富岡が、自らスタインの著書を日本語に翻訳することにより、直接受けた影響を分析しているが、富岡が詩から小説へと転じたことがスタインの影響によるものであることを論じるのを急ぐあまり、スタインの実験的な英語表現をどのように日本語に翻訳しようとしたかという考察はやや手薄になっている。スタイルとテーマとの関連性を実証するためには、富岡によるスタイン翻訳に対してさらに詳しい分析を要求したい部分もある。

第三章と第四章は、論文の焦点を前衛的な言語表現の影響関係からテーマの類似性へと移行させ、家族、とくに母と娘の関係に注目している。筆者は修士課程在籍中から家族がどのように物語化されるか、という点に心理学と文学の両面から関心を抱いてきた。その知識や見解を活かし、スタインと富岡が内包する文学的主題の根源を比較考察している。

論の構成は概ね緻密であると評価できる。富岡と同時代の女性作家との比較であれば富岡の独自性がより鮮明になったであろうし、リュス・イリガライやジュリア・クリステヴァへの言及があればさらに理解が深まり説得力を増すことになったであろうと思われる。またスタインのモダニズムを論じる際に絵画からの影響が看過できないこと、スタインや富岡が抗おうとした男性的な知性とはどのようなものであるかということについて、さらに説得力のある論考が必要であることなど、弱点も指摘できるが、本論文の価値を根本的に損なうものではないと判断する。審査において本論文が博士の学位に値する論文であるという合意を得たことを報告する。